

【書評】竹田青嗣（二〇二二）『新・哲学入門』
講談社現代新書

小林 隆児

精神科医である評者が精神療法研究を遂行する上で大きな影響を受けたのが、本書の著者による『現象学入門』（NHKブックス、二〇〇二）である。その書評を私は一〇年前に書いている（そだちの科学、二〇号、二〇一三、一一四—一二六頁）。以下、その一部を再掲することから始めよう。

* 著者は同書のなかで、フッサールの主張を次のようにまとめている。「人間のさまざまな判断が、これは間違いない（不可疑だ）という確信を伴うことの根拠はなにか。（知覚）だけは、つねに意識の自由にならないものとして現われる。（主観）は自分の外側にあるもの实在の「確実性」を、主客の「一致」という仕方得ているのでは全くない。（主観）はそれをただ自分の内部からのみ、なんらかの対象存在の「不可疑性」（＝妥当）という仕方だけで得ている。そして（主観）にそういう「不可疑性」を与える根本の条件は（知覚）という（主観）にとつて自由にならないものの存在にほかならない」と『現象学入門』五七頁。：とところが本当にそうであろうか。発達の観点に立てば、（知）がどの段階で生まれるか、厳密には定かではないとはいえ、知覚表象そのものがある意味をいまだ明確には持ちえない段階での知覚体験もあるのではないか。それは評者が常々主張している原初的知覚による体験様式である。この知覚体験の特徴は、なんらか

の意味をもつものとして知覚表象が志向されがたく、情動のありようと共時的に作動するような体験様式である。快か不快か、安心か不安か、いずれかによつて意味的世界が容易に変貌を遂げるものとして体験される知覚様態である。そう考えた時、著者も、フッサールの現象学に依拠しつつも、「不可疑性」を与える根本の条件は、フッサールが取り上げた（知覚）というよりも、情動ではないかと自身の見解を述べている（同一三七頁）。このことに評者も深く賛同する。：本書の主題である（主観・客観）図式に孕まれた近代哲学の根本問題の解明は、革新的な意味を持つと思う。

* 以来、精神療法の（患者・治療者）関係で私は主観的（というより間主観的）に体験したことをかたちにすることの重要性を確信するようになった。それまで以上に、患者が何を語ったかではなく、患者がいかに語り、そこで私の心にどう響いたかを大切にしようになった。精神療法研究における核心は、テキストの内容そのものではなく情動体験に潜んでいると考えるようになった。

今から三〇年近く前に、乳幼児と母親を一組の対象として観察し治療するという理念を掲げて母子ユニットを創設した。そこで徹底して鍛えられたのは、言葉が生まれる前の子どもと親との関係の有り様の観察力であった。コミュニケーションの中でも情動的コミュニケーション世界である。私は人間の発達とその病理を「関係」と「情動（甘え）」に焦点を当てることの重要性を強く認識するようになった。そうした背景があったからこそ、先の『現象学入門』で著者が「不可疑性を与える根本の条件は（知覚）ではなく情動ではないか」と主張していることに強く賛同したので

ある。

* 本書は著者の集大成『欲望論』二部作（『意味』の原理論と『価値』の原理論）（講談社、二〇一七）を一般読者向けに分かりやすく説いた（？）入門書である。

本書の構成は、第一章「哲学の本質」と第二章「本体論的転回と認識論の解明」に始まり、本書の主題である第三章「欲望論哲学の開始」へと入っていくが、「意味と価値の本質学」において著者は「人間のみなならず、生き物の世界認知にとって、その第一の契機となるのは、知覚ではなくむしろ情動の契機である。欲望論哲学において：『情動』を世界構成の根本契機とすることによって、はじめて『価値』の本質論が可能となる」（七三頁）と宣言する。そして「生き物は対象を捉えるまで接近の努力を維持しなくてはならず、その達成までは、欲望・衝迫の内的ノイズ（快・不快）に耐えねばならない」（八二頁）。そうした内的体験によって「快・不快というエロスの審級の上に『予期不安』という新しいエロスの審級が階層化される：。人間のエロスの審級は、こうしたプロセスをへて本質的にエロスの審級の重層的な構造を形成してゆく」（八二―八三頁）。ここに著者の「意味と価値の本質学」の核心が簡明に述べられている。

次いで著者は第四章「世界認識の一般構成」で「生き生きとした今」の構成を論じる中で、フッサールの現象学に依拠しながらも「純粹意識」に定位する本質観取の方法を、「現前意識」に定位する「本質洞察」へと位相変様し、音楽体験が喚起するメロディを例にとり、「持続的顕在」、「情動継起」、「情動累積」という三契機として述べ、さらに「音楽体験の本質洞察は、われわれの『日常世界』における一切の自明性（ヴォルフガング・ブラ

ンケンブルク）の確信構成についてのプロトタイプとなる」（一六六頁）とも論じている。

第五章「幻想的身体論」では、「身体」の本質洞察において、「エロスの感受」「存在可能」「能う」という三つの契機が提起される。次いで、第六章「無意識と深層文法」で、『無意識』とは、本質的に、自分の存在についての自己理解と他者の理解との『ズレ』の自覚として現われる観念であり、この「ズレ」を克服しようとする自己配慮を含んでいる。そうした事象・経験一般をわれわれはいわば『本体化』して、『無意識』と呼んでいる」（一六一頁）。さらに、『無意識』が存在するという信憑は、われわれの『幻想的身体性』（情動、欲望、関係態度、美意識、倫理観など）が、私の現在のな自己理解に本質的に先行し、かつ、それを超える出る仕方存在しているという事実についての自覚と確信であり、またそうした自分の幻想的身体性に働きかけようとする関係的な存在配慮を意味する。つまり、『無意識』とは、なんら実体としての心の一部分あるいは領域ではなく、本質的に、私の対他的な関係世界における『現実性』の一領域にほかならない」（一六三頁）という。

そしていよいよ第七章「価値審級の発生」で本丸「価値審級の発生論」へと進展するが、そこでの決定的契機は「人間が言語ゲームによる関係世界のうちを生きること」である。これを契機として、動物的な「快・不快」「予期・不安」の審級は、人間の幻想的身体における価値審級、すなわち「よい・わるい」「きれい・きたない」へと転移する。人間の幻想的身体は、つねにすでにこうした発生的プロセスの集積であり、その縮約された所産である。幻想的身体の発生論はこのプロセスの本質構造の洞察にほか

ならないが、それは、以下のようなエロス中心性の転移の道すじをたどる。すなわち、①身体的「快・不快」と、その展開としての「エロスの予期・不安」、②「身体的・能う」のエロス、③「関係感情」の生成による関係的エロス、④「初期禁止」を契機とする「よい・わるい」「きれい・きたない」の審級の生成、⑤ルー規範の順守をめぐる承認価値、すなわち「自己価値」エロスの生成である（一七二—一七三頁）。

*ところで、評者の生業とする精神医学の世界は、身体医学に伍して科学的であろうとして、いまだに（主観・客観）図式への囚われから脱することができずにいる。その端的な表れは一九八〇年にアメリカで始まった操作主義的国際診断基準（DSM）のわが国への導入である。病因論的説明が一向に進まないゆえに、それまでの精神分析を基盤とする精神力動的精神医学で用いられてきた種々の疾病概念はエヴィデンスの乏しさゆえに捨象され、客観的指標として行動観察に特化した特徴を中心に概念化されたのがこの操作主義的国際診断基準である。言動の意味が文脈に規定されていることを考えれば、いかに的外れなものかは容易に推測されるにもかかわらず、である。

それゆえ当然の成り行きというべきか、今ではその診断体系が最新の神経生物学や遺伝学の知見と整合性をもたないとの理由から根本的な変更を余儀なくされようとしている。その中核にあるのは現在の病態を複雑な遺伝・環境要因と発達の段階によって生成されたものとして捉える視点である。子どもに限らず患者の病態を関係の文脈で捉え、そこで起こっている事象の意味を発達過程の中に位置付けて考える視点である。今やこうしたエピソード（後成的）な考え方は世界的なコンセンサスを得てい

る。

世界を見渡すと、精神療法の世界にもパラダイム・シフトが起きてきている。昨春秋、評者はアラン・N・シヨア著『右脳精神療法』（岩崎学術出版社）を訳出した際にそのことを強く実感した。シヨアの主張の根幹には「人間の幼児期に発生する出来事、特に社会環境との相互作用は人生の最初の数年に成熟途上の脳の構造に消えることなく刻印される」という対人関係神経生物学を柱に、「情動」に焦点を当てながら「関係」に視点を向けた精神療法の重要性が説かれている。対人関係神経生物学の信条は「心と脳の構造と機能は特に経験、とりわけ情動関係を含む経験によって形作られている」というものである。その中心にあるのが、情動（感情）の一義性、つまり情動こそが人間の経験の底板だということである。「関係」と「情動」を軸に精神療法研究を蓄積してきた評者と軌を一にする立場である。

*本書に戻ろう。著者は「純粹意識」に定位する本質観取の方法を、「現前意識」に定位する「本質洞察」へと位相変換し、「持続的顕在」、「情動継起」、「情動累積」という三契機を取り出している。この三契機から私がすぐに連想したのは、著者も引用しているスターンの鍵概念である力動感（生氣情動の訳もある）（vitality affects）と、現実を意味する二つの概念のうち、リアリティと対比されるアクチュアリティである。著者が「現前意識」と称しているのは、この「アクチュアリティ」に近似している、というよりもそのものではないか。なぜなら著者は『現前意識』は、人間の一切の世界確信の構成を支える、それ以上遡行されえない最後の『底板』にほかならない。現前意識は、われわれの生と世界の『現実性』の根本的前提であり、誰も『その背後に回る

「ことができなない」絶対的な基底である」(九七頁)と論じているからである。

実は「情動」と「関係」に焦点を当てた精神療法の実践では、患者・治療者関係に立ち上がる「間主観」としての情動の動きを掴み取ることができるとは治療の成否を決するほどに重要な意味を持つ。面接場面での「現実」とは情動の動きとしてのアクチュアリティを指す。とするならば、アクチュアリティは、われわれの生と世界の「現実」の根本的前提であり、誰も「その背後に回ることができない」絶対的な基底だということになる。

しかし、精神医学は科学的であろうとして、いまだに「リアリティとしての現実をみる」ことに汲々としている。患者の話を丁寧に聞き取り、症状を丁寧に捉えて診断すること、これらはすべて「リアリティとしての現実をみる」行為である。「アクチュアリティとしての現実をみる」ことなどほとんど眼中にない、というよりも「感じたことを取り上げること」は非科学的態度だと信じて疑わない。恐ろしいことに、わが国の精神分析学界でさえ、いまだに「主観・客観」図式に強く囚われ、精神療法のエヴィデンスを変数の数量化によって可視化するなどという倒錯的な試みが続けられている。

次いで、「音楽体験の本質洞察は、われわれの『日常世界』における一切の自明性(ヴォルフガング・ブランケンブルク)の確信構成についてのプロトタイプとなる」(一一六頁)ことについて。以前評者は自閉スペクトラム症に現出する「自明性」の病理に関する論考を発表したことがある(「広汎性発達障害にみられる『自明性の喪失』に関する発達論的検討」精神神経学雑誌、一〇一卷、一〇四五―一〇六二頁、二〇〇三)。そこで私は、広汎

性発達障害(今は自閉スペクトラム症と称されている)にみられる言語障害の本質は、対象のもつ意味を、養育者とのあいだで共通の体験を基盤として獲得されていないところにあることを指摘し、彼らにとつてのことは自らの体験世界と調和することなく、われわれの意味内容を包含したことが彼らに焼き付くために、体験と意識とのあいだに深刻な乖離がもたらされること、よって、「自明性」が獲得されるためには、体験世界で子どもたちが外界に対してどのように着目し、関わっているかを分かち合う中で彼らにことばを働きかけることが決定的に重要であること、そのためには、相互の身体、情動が響き合う情動的コミュニケーションの成立を目指すことが治療の要諦であると論じた。

著者は「本質洞察」を展開する中で、精神障害についても以下のように触れている。「神経症(は)：母・子の(つぎに親子)基礎的「関係感情」の本質的な不調に求められねばならない」(一八七頁)。さらには「人間の心は何らかの不安に襲われると、これに対処する手段を探そうとする。だが、その対処の能力が無効であるという経験が重なる、不安の情動は蓄積され、『身体化』されて、たえざる不安の感覚が人間の幻想的身体の基礎的情動となる。これを私は『不安身体』と名づける。『不安身体』の体制化が、多くの心的障害の中心的原因である」(一九三頁)と。今日、精神障害の大半で、その精神病理的病因は情動(感情)調整不全にあるとの考えが広がってきた。その最大の理由は、「人間の幼児期に発生する出来事、特に社会環境との相互作用は人生の最初の数年に成熟途上の脳の構造に消えることなく刻印される」ゆえアタッチメント形成の成否が決定的な重要性を持つことが明らかになったからである。アタッチメント関係とはまさに情

動的コミュニケーションの世界である。「情動」と「関係」に焦点を当てた精神療法は人間関係の基盤である情動的コミュニケーションを介して病者の感情調整を目指す試みであるが、これまでの精神医療の大半が対症療法的手段しか持ち得なかったことを考えると、これこそ根治療法への道を切り拓くものである。

対人関係神経生物学の視点に立てば、脳・心・体は事実上一体として未分節なかたちで発生する。よって、生誕時に始まる情動的コミュニケーションは、まさに脳・心・体コミュニケーションである。そこでは、知覚、運動、情動の各過程は未分節なかたち、すなわち〈知覚・運動・情動〉過程として機能する。これこそ原始的知覚体験世界である。

今や混迷を極めている精神医学にあつて、発達の視点に立ちエピソード的な発想を持つて、枝分かれし専門化し続けている心の医学関連領域を包含し統合する視点が求められている。その意味からすれば、「現前意識」に定位する「本質洞察」によって生まれた、「情動」を世界構成の根本契機とする「欲望論」は、臨床研究者である評者にとって心強い発想の導き手である。

すでに規定の紙幅を大幅に超えた。本書はさらに、「善と悪」、「きれい・きたない」審級、「美醜」、「芸術美」、「芸術の本質学」、「芸術の普遍性について」と続く。これらは評者の守備範囲ではとても手に負えない代物である。よって、ここで筆を擱くことにする。

なお、本文に紹介されている拙稿については感性教育臨床研究所のHP <http://kansai-kobayashi.com> 「論文・その他」の該当年からダウンロードすることができる。